

栗原類 自分らしく生きるために

「生きやすい環境づくり」

自分自身で築き上げる

To live to yourself

可能性は無限大。
ロンドンのランウェイを駆け抜けた
「白鳥」の軌跡

モデル・
大山輝楽里さんが
“輝く”理由

ダンスを通して成長する、自信を持つ！

DANCE studio
DUAL
FUREAI

発達に大きくかわる大人との信頼関係
愛着障害から考える発達障害

愛甲修子さん

—横浜市教育委員会が挑む「学びのきっかけ動画」プロジェクト—

子どもが主役の動画作りで、
学びの壁をワクワクに変える！

Ride the Wave of Victory.

VICTORY!

GO!!

SAVE!

湘南のサッカーは、

GOAL!!!!

いつも全カだ。

2026/2027シーズンも
ホームゲームチケット
プレゼントを実施予定！
お楽しみに！

湘南ベルマーレ

©SHONAN BELLMARE

湘南ベルマーレ ホームゲーム

観戦チケットプレゼント

療育手帳・精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方と、
同行者の方1名を湘南ベルマーレの
ホームゲームに抽選でご招待します。

本ページにて募集の「湘南ベルマーレホームゲーム観戦チケット
プレゼント」についてはリーグおよび、クラブの発表情報に合わ
せ、以下のURLにて詳細を随時お知らせいたします。

一般社団法人メルディアHP <https://mlda.jp>





栗原 類

自分らしく生きるために

現在、俳優やモデル、タレントとして活動する栗原類さん。2016年には自叙伝「発達障害の僕が 輝ける場所をみつけた理由」を執筆し、彼自身の持つ発達障害に関しても注目を集めることになりました。

自分自身で築き上げる「生きやすい環境づくり」

中学生ごろから雑誌「メンズノンノ」などでモデルとして活動し、ヨウジャヤマモトのパリコレクションにも出演した栗原類さん。2012年ごろからは、ネガティブモデルとメディアの注目を集め、バラエティやドラマなどにも出演するようになりました。

そんな栗原さんが発達障害だと知ったのは9歳のとき。映画『ファインディング・ニモ』を見た際に、「ドリーってすごく面白い。すぐに忘れちゃうんだね」と母親に言ったところ、「あなたも一緒に話して話してくれたそうです。」

当時、母親の仕事の関係もありアメリカで生活していた栗原さん。クラスの担任が、母親に「発達障害の疑いがあると思うから診断を受けて」と言われて病院にかかったところ「典型的な発達障害」という診断。アメリカの教育委員会の方針もあり、診断について、母親には「本人にはすぐに言わなくてもいいから、タイミングが来たときに話してあげてください」と言われたといいます。

「話をされたときどう思ったのか、正直あまり覚えてないんですね。記憶力の問題もあるんですが、でも『ああそうなんだ』という程度で、大ごとだとは思っておらず、ショックもなかったです」。

発達障害を知ったきっかけは映画『ファインディング・ニモ』

CONTENTS

VOL. 74

MELDIA
2026 JUL.

03 自分自身で築き上げる「生きやすい環境づくり」

栗原 類

自分らしく生きるために

06 可能性は無限大。ロンドンのランウェイを駆け抜けた「白鳥」の軌跡

モデル・大山輝楽里さんが “輝く”理由

09 ダンスを通して成長する、自信を持つ!

DANCE studio DUAL FUREAI

12 発達に大きくかかわる大人との信頼関係 愛着障害から考える発達障害

愛甲修子さん

14 一横浜市教育委員会が挑む「学びのきっかけ動画」プロジェクトー

子どもが主役の動画作りで、 学びの壁をワクワクに変える!

16 第30回全日本IDバレーボール選手権大会に向けて

東京×宮城代表チームの練習試合に密着

18 ASDが抱える感覚の問題

数値化することで繋げる社会支援

20 福祉の枠を超えるアパレルブランドの挑戦

atelier announ

22 おさんぽ DE 楽しむ!

～自然を感じる開放的な空間!～ 葛西臨海公園で手ぶらBBQを満喫

24 シンママまると息子の成長記録 VOL.8

26 時には思い通りにいかなくても。大切にしたいものは、限り有る「人間的なもの」

水越けいこ M Size はじまり Again

28 自立訓練(生活訓練)事業所「メルディアライフネスト浦和」

生活力を育み、自分らしい進路を見つける

31 プレゼント





好きなものがあったから理解できた 自分にとっての「居心地のいい環境」

に変わってください」など、随時相談も行うそうです。

今でこそ、栗原さんの特性は事務所内でも共有され、理解を得ることができていますが、現在の事務所に入った当初はなかなかうまくいかないことも。「最初のころは、自分の特徴を説明しても、一発では当然理解されず。僕の説明は世間一般で言う『わがまま』という言葉で受理されました」。

しかし、そんな中で働いていると仕事にもちよつとした異変が開始したそうです。それに気が付いたマネージャーは「仕事を詰め込み過ぎてしまったかも」と、だんだんと栗原さんの意見に耳を傾けるように。マネージャーの異動も頻繁にあるそうで、担当が新しくなるたびに「一から説明し、信頼関係を作り直す努力をしているそう」。「大変だけど、いい環境にいるためにも、自分がやらないといけない。自分が置かれた状況の中でできることを頑張って、行動しなければいけません」。

これらを一通り語ったあと、このように続けました。「だからといって、僕も当

いましたね」。

自分が働きやすい環境は 自分自身の努力でつかみ取る

「忘れやすい」「記憶が苦手」という特性を持つ栗原さんですが、現在生業にしているものの一つに俳優業があります。4月にも舞台『社会で生きる動物』に出演しました。

俳優業はセリフや立ち回りなど覚えることがたくさん。「舞台に関しては基本的に1か月以上、みなさんと稽古をし

然、最初から全部ができたわけではありません。でも『好きなものに対してはちゃんと頑張りたい』と言われてきたので、そこは本当に努力してきました。

でもやっぱり、今も同世代と比べたら私生活ではできていないことがたくさんあります。寝落ちしちゃうこともあるし、食べ終わったお皿をそのままにしちゃうこともある。今はそういうのを頑張つてできるようにしようとしています」。

「好きなもののために頑張る」 ここから培われたリクエスト力

しっかりとリクエストができるよう

になったのも、「早くから好きなもの、居心地のいい環境があったから」と栗原さんは人生を振り返ります。「ある種不平等でつまらないような組織の中で生きていくことは、ある意味大事ではあるんですよ。苦しいことを耐える経験として

も、だからといって学校が全てではないんです。僕も勉強が嫌いだったけど、母親はゲームやYouTubeなど好きなことをすることにに関しては尊重してくれていました」。

こうした環境の中で、何が好きで、という環境が自分にとって適切なのか、自分自身の理解が進んだからこそ、他人

に意見や思いなどを説明できるようになったようです。

「今はSNSがより身近なものになって、いろんな大人を見ることができるよう代になっていきます。学校外部でも、目標としたい人間を見つけることもできるので、それは人生にとってはプラスになるんじゃないかな。学校では得られない栄養素になると思うので。結局は、興味があれば頑張れる。だから『頑張るものが何か』はそれぞれが見つけて、『そのために頑張る』という感覚を身につければ、もう少し生きやすい環境になるのかなと僕は思います」。

発達障害の僕が輝ける場所をみつけれられた理由

8歳で発達障害と診断された僕が、なぜ自分の才能を活かす場所をみつけて輝けるようになったのか。同じ障害がありながら、いつも僕を信じて導いてくれた母。そしてアメリカの「発達障害」に対するおらかな環境と、学んだ英語が自信を持たせてくれたこと。されて嫌なことを人にはしなないと決めた、人として愛される生き方など。ADDの特徴である衝動性を抑え、苦手なコミュニケーションを克服し、モデル・タレント・役者として歩んできたこれまでの道のりを語る。

栗原類さん

1994年12月6日生まれ。東京都出身。映画やドラマ・舞台など役者業を中心に活動している。また発達障害に関連した講演会やイベントにも参加している。

https://www.instagram.com/louis_kurihara/?hl=ja



©KAYO UME



お仕事の様子



苦手な“覚える”を 乗り越え表現者 として舞台へ

4月4日から12日の9日間、舞台『社会で生きる動物』に出演した栗原さん。会話劇を見事に演じ切りました。
© 2026 ZIKANSEISAKU
撮影：園岡淳

発達障害を公表 してからは講演や イベント出演も

多治見西ロータリークラブ創立60周年記念事業『栗原類さんと一緒に学ぶ発達障害を知って、みんなで考えるこれからの社会』に参加している様子。自身の感じたことなどを話しました。
写真：多治見西ロータリークラブ



LONDON FASHION WEEK 2026 Home of Fashion

可能性は無限大。ロンドンのランウェイを駆け抜けた「白鳥」の軌跡

モデル・大山輝楽里さんが “輝く”理由

ダウン症アーティストとして、世界四大ファッションウィークの一つ「ロンドンファッションウィーク」のランウェイに2年連続で立った、大山輝楽里(おおやまきり)さん(20)。

2026年4月、輝楽里さんは川崎市の福田紀彦市長を表敬訪問し、ロンドンでの活躍を報告しました。

その後のインタビューを交え、彼女のこれまでの歩みと、ご両親、そして彼女にモデルとしての想いを託したデザイナーの想いをお届けします。

「モデルとしてランウェイを歩きたい」
その夢とともに世界へ羽ばたく

4月24日、川崎市役所を訪れた輝楽里さんは、ロンドンで実際に着用した衣装に身を包んでいました。

今回のロンドンファッションウィークでのテーマは、映画やミュージカルでも知られる「ベリリー・エリオット(リトル・ダンサー)」の世界観。衣装は、白鳥の羽をイメージした繊細なチュール素材が何層にも重なり、ベールとケープが一体となったような幻想的なデザインです。昨年(2025年)のロンドンファッションウィークでは「アリス・イン・ワンダーランド」をテーマにした白の女王の役柄での衣装でしたが、今年はトップパレリーナの役柄で、自身のバレエ経験を活かしたしなやかな動きで、観客を魅了しました。

福田市長から「世界を舞台に挑戦する姿は、市民の誇りです」と言葉をかけられると、輝楽里さんは「緊張したけど、楽しかった」と、嬉しそうに頷きました。

リトルカムデン代表でデザイナーの岡田もも子さんは、輝楽里さんを起用した理由について「2年前のオーディションの時、彼女はハンディを抱えながらも、非常に緊張感が漂う雰囲気の中で、果敢に挑戦してくれて、すごく輝いて見えたのが印象的でした。私たちのブランドは、障がいや年齢、性別といった壁を

すべて取り払い、誰もがファッションを楽しめることをコンセプトにしています。輝楽里さんは、その理念を存分に表現してくれる存在です」と語ります。

趣味、仕事、そしてモデルへの情熱。
日常の中に宿る「表現者」の魂

モデルとして世界を股にかける輝楽里さんですが、普段の生活はとても努力家で、多才な一面を持っています。平日の月曜日から金曜日までは、花屋で勤務し「育てる、作る、販売する、届ける」という仕事に従事しています。趣味は、「ダンスとTikTok、カラオケも好き」と話す輝楽里さん。3歳から15年間続けたモダンバレエや、茶道、中学時代に始めたチアダンス、そして日本舞踊や水泳。

それらの経験が、彼女の表現力の礎となっています。

特にはまっているというTikTokでは、動画の振付をすぐ覚え、構成やタイミングをすべて自分で考え、下書きに何本も溜めるほど熱心です。「自分で決めて取り組むことが好き」という言葉通り、自律した一人の表現者としての顔を覗かせます。

お母さんの知沙さんは、モデル活動を始めたきっかけをこう振り返ります。

「高校卒業後、働くことの他に何か挑戦したいことはないかと話していたところ、控えめな性格だった輝楽里が『世界のランウェイを歩きたい』と、初めてその思いを聞かせてくれました。一人で世界のランウェイに立つことは、まだ見ぬ扉の向こうの景色でしたが、その言葉をきっかけに大きな挑戦への一歩を踏み出しました。リトルカムデンのオーディションに挑み、2年連続でロンドンの舞台上に立ちました。さら



には、ロンドン挑戦後のデザイナーナーやモデルたち



ちとの忘年会で来年の抱負を話す機会があり、輝楽里は『アンバサダーになりたい』と新たな目標をみんなの前で立て言ったのです。本人の口からあんなにも力強い言葉が出たことに、本当に驚きました。そして今年4月に実際に任命されました。夢を言葉にすることの大切さを改めて感じさせてくれました。

「衣装を着て歩くと、みんなが笑顔になってくれるのが嬉しい」。彼女の全身から溢れる「表現することが好き」という気持ちが、見る人の心を動かします。

宣告を乗り越えて——
家族が見つめてきた「笑顔の軌跡」

ご両親は、輝楽里さんの生後一週間後に医師から彼女がダウン症であると宣告をされました。「具体的な情報を得ら

れないまま、初めての子育てを手探りで進める中、娘の尊厳と笑顔に救われ、母親としての愛情を深めていきました。この子に光に満ちたキラリと輝く人生を歩んで欲しいと未来への希望を抱き、父親の一字を取り、輝楽里と命名しました」とお母さん。

ご両親は、その「笑顔」を絶やさないよう、輝楽里さんにたくさん事を経験させ、やりたいと言ったことにはすべて挑戦させてきました。モダンバレエ、チアダンス、そしてモデル。輝楽里さんは20歳を迎えたいま、誰よりも力強く世界を歩いています。

家族の仲がとても良いと語るお父さんの雄輝さんは、お母さんと共に、輝楽里さんの最大の理解者です。家族でカラオケに行き、地元川崎のアイドルグルー





ダンスを通して成長する、自信を持つ!

DANCE studio DUAL FUREAI

様々な障がいを持った人を対象に、15年ほど前からダンスレッスンをやっている「デュアル・セアリー」。プロのダンサーとしてキャリアを積んできた太田裕子さんが、どのような思いでクラスを立ち上げたのか語っていただきました。

デュアル・セアリー代表の太田裕子さんは、元々プロダンサーとしてショーに出演するほか、インストラクターとしてプロを目指す人たちの指導にもあたっていました。そのときに出会ったのが1人のダウン症の女の子。「健常者クラスだったのですが、体験をやってみて、ついていけそうだったし、やる気もあったので、入ってもらったんです」。レッスンも、発表会にも出られる。ただし、クラブの

『謝らないでいい環境を作りたい』
ダンススクール開設に至った思い

ダンススクールを運営する株式会社デュアル・セアリー。ここでは幼児から趣味でダンスをする社会人、プロを目指す人まで、様々な人を対象にレッスンを行っています。そんな同社は、ダウン症、自閉症、発達障害、知的障害、既存症など、様々な障がいを持った人を対象としたレッスン「FUREAIダンス」を実施しています。対象年齢は小学1年生から大人まで。個々の体力やレベルに合わせて参加することもできるようになっています。通常の障がい者対象クラスを東神奈川、池袋、上大岡、横浜で行っているほか、KPOPを中心にレッスンする女の子が対象の「ガールズFUREAI」も開講。現在、全クラス合すると、約50人が通っているそうです。

最後に、輝楽里さんのご両親からメッセージを頂きました。
「最初は手探りをしながら悩み、壁にぶつかることもあると思います。でも、子どもたちの可能性は、私たちが思っている以上に無限大です。輝楽里が人前に立ち、輝いている姿を見せることで、世の中にある『障がい者はこうあるべき』という固定観念を少しでも変えていきたい。それが、後に続く子どもたちの勇気になればと思っています」。



「家では甘えん坊なところもあるけれど、舞台上に立つと『目』が変わる。その成長には驚かされるばかりです」と話すお父さんの眼差しは、慈愛に満ちています。
20歳という節目を、ロンドンのランウェイという最高の結果で証明した輝楽里さん。大山家にとって、彼女は単なる「守るべき存在」ではなく、共に未来を切り拓く「希望の光」そのものです。

「これからの、一生懸命頑張ります!」
強く、そして優しく宣言した輝楽里さん。彼女の挑戦は、これからも多くの人々に勇気と元気を与え続けていくことでしょう。

大山輝楽里さん

ダウン症アーティスト。『LITTLE CAMDEN』のモデルとして、ロンドンファッションウィークに出演。バレエや日本舞踊、チアダンスなど多才な経験を活かし、モデルとして活動中。
https://www.instagram.com/kirari_princess.channel/



LITTLE CAMDEN
岡田もも子さん



輝楽里さんと福田紀彦市長。
※かわさきパラムーブメントとは、川崎市が、さまざまな違いを大切にしながら、誰もが自分らしくいきいきと暮らせる共生社会の実現を目指す取組です。

計4名様PRESENT

KIRARIオリジナルグッズ
缶バッチ、ハンドタオル、ハンドミラー、トートバッグいずれか1点 ※種類は選べません
※トートバッグサイズ 横20×縦30×10cm
詳しくはP.31

決まりでコンテストには出られなかったそうです。「コンテストとなると、勝たなきゃいけないし、でも理不尽だとも思うし……どちらの気持ちもわかるんです。でも彼女と親御さんも苦しくて、泣いちちゃっているのも知っていました」。

さらにレッスン中に親が謝っている姿を何度も見かけたといいます。「その子の親御さんが『うちの子がすみません』と何度も謝っていたんです。何も悪くないし、迷惑もかけていないのに。たまたま授かったお子さんに特性があったというだけなのに、『こんなに人に謝って生きていかなきゃいけないの？ それなら、謝らなくていい環境を作ってあげたい』と思いました」。

そんなときに「ダンススタジオをフランチチャイズでやってみないか？」という話が舞い込んできました。「ただのダンサーで経営の勉強もしていないので、ずっと断っていたのですが、『自分のスタジオを持てば、保護者の方々が謝らなくてもいい環境が作れる』と思い、挑戦することにしました」。太田さんは障がい者クラスを作ること条件にフランチチャイズ経営に挑戦。知り合いのツテを頼って体験に来てもらうなど地道な努力で少しずつ盛り上げていきました。運営を始めると、より多くの障がい者と関わるように。次第に太田さんは「みんながダンスを純粋に楽しめるシーンをもつ

と増やしていきたい」と考えるようになったそうです。そこで、より環境を整えるためにも独立を決意。現在のデュアル・セアリー及びDUAL FUREAI DANCEが誕生しました。

ダンスを通じて成長する喜びを生徒や親と分かち合う

レッスンで使われるのはヒップホップやR&Bなどの曲が中心。ダンス技術の差や、身体能力などは考慮されているものの、内容は本格的。「発表会までに一つの作品を形にする」という目標の元で運営されており、いい意味で「障がい者のためのメニュー」という感じではありません。「障がいを持っている方たちは、『ジャンボリミックス』など分かりやすいメロディとリズムの曲を好む傾向があります。でもFUREAIではあえて健常者クラスに寄せています。みんなが喜ぶものばかりやっていても成長が見られないので、クールなものも聞かせて、挑戦させることを意識しています。基本的には『障がい個性』という認識で、特別扱いはいしません」。

実際、どの子どもたちも大きく成長するといいます。「ただ走り回っていただけの子が、フォーメーションにつけるようになったときには『やったー』と大喜びです(笑)。私たちが言っていることを

いなくても、子供たちの成長を見ていくうちにパパやママも欲が出てくる。この0から1の体験が大切だと思うんです。そういう部分ではある意味、親御さんのマインドもダンスを通じて変わってくれているのかなと思います」。

太田さんの活動に賛同し集まるのは、生徒たちだけではありません。ダンスを教える先生のSONAさんもその一人。普段はプロのダンサーとして活動していますが、彼女はダウン症の兄を持つことから「ダンスで障がい者の手伝いになることができたらいな」と思っていたといいます。「太田さんを知っているダンサーさんから、このクラスのことを聞いて、『ぜひ関わりたい』と連絡しました。

保護者の声

今は作業所に通っているのですが、そこだとなかなか運動が出来ず。土日に好きなことが出来る場所を探して、ここに来ようになりました。楽しみが増えたようで、それが一番良かったですね。

高校3年間ダンス部だったので、卒業後に探して通うようになりました。にこにこで踊っているのが楽しいです。(レッスン歴約2年半)

親に運動してと言われて始めました。ダンスはすごく楽しいです。音楽に合わせて踊るのも優勝！(レッスン歴約2年)

保護者の声

小学校で支援級なのですが、運動全般が苦手。でもダンスだけは得意だったので、検索してここに来ました。始めてからは体がすごく硬かったけど柔らかくなりました。それに、学校でもたまにみんなの前で踊ったりするみたいで。前は引っ込みがちだったのですが、前に出られる自信が付いたみたいで良かったです。

身体を動かしたいと思って通うようになりました。ダンス初心者で緊張しちゃうのですが、楽しいです。(レッスン歴1か月)

実際に教えていると、みんな明るくて、個性もそれぞれ。すごく楽しいです」。

太田さんは障がい者のダンスクラスの意義をこのように語ります。「ダンスを通して明るくなったり、体が強くなったり成長を感じてほしい。それに、たとえ下手くさでも、棒立ちでも舞台上に立てたという体験が、すごい自信になるんです」。

最後に「これから先、何か目標はありますか？」という質問に太田さんが悩んでいたところ、横から「私はありますよ、24時間テレビに出る。……え？ 壮大すぎ？ 」とSONAさん。それを聞いた太田さんは「いい！ 24時間、まじか！ 出たいって思った！ 今!!」と笑顔を見せていました。

太田裕子さん

株式会社デュアル・セアリー代表。プロダンサーとして活動したのち、ダンス講師に。多方面のダンスジャンルにて指導を行う。

SONAさん

デュアル・セアリーのインストラクターを務める。そのほかBE:FIRSTなどのMVにも出演するなどダンサーとしても活動している。



ダンススクール デュアル・セアリー
神奈川、東京でダンススクールを運営。小学生から大人まで様々な人を対象にレッスンを
行い、ダンスの楽しさを伝えている。



2025年には FUREAI クラス 単独発表会を初開催



2024年には「FUREAIダンス」単体での発表会を実現。保護者が謝らないでいい環境を実現するためにも、障がい者クラス単体の発表会は太田さんの夢の1つでした。

1名様 PRESENT



デュアル・セアリー
オリジナルTシャツ

詳しくはP.31

INTERVIEW



INTERVIEW

SHUKO
AIKOU

「知的障害は愛着障害と密接にかかわっている」「知的障害は良くなる」と語る臨床心理士・言語聴覚士の愛甲修子さん。これまで児童相談所や知的障害者更生施設、小中高、大学の教育現場、病院など様々な場所での経験談を元に、その考えを語っていただきました。

後天的に起こる「知的障害」 発達との関連性を考える

まず愛甲さんの考える知的障害とはどのような状態なのでしょう。知的障害にも原因は様々。アミノ酸分泌異常などの先天性のものもあれば、高次脳機能障害など後天性の場合もあると考えています。例えば生まれつき聴覚障害だったことがわからず、早期に適切な処置を受けられなかった場合。聞くことで得る刺激を幼少期に受けられず、発達が停滞してしまうということもあると思います。今は出生時の検査方法など医療も進歩しているのですが、昔はこのようなパターンも多くあったのではないかなと思います」。

噛みつきがなくなった 高度行動障害の39歳

この考えに至る大きな要因となったのが、キョウコさん（仮名）の存在。愛甲さんは知的障害者更生施設で当時39歳の彼女と出会いました。生まれつき聴覚障害を持っていた彼女は、自傷行為により失明しており、盲ろう者として生きていました。出会った当初は噛みつき行動が酷く、職員全員が怪我をしていたそうです。さらに彼女を制御するため、尋常



愛甲修子さん

臨床心理士・言語聴覚士。千葉大学大学院教育学研究科修士課程修了。精神科医の神田橋條治と日本臨床心理士会元会長の村瀬嘉代子に師事。淑徳大学兼任講師、日本児童青年精神医学会・日本心理臨床学会、日本臨床心理士会会員。発達障害当事者の不思議な身体感覚が愛着障害の原因ともなっていること、愛着障害と発達障害は異なるスペクトラムであること、そして愛着障害も発達障害もスペクトラムなので障害ではないこと、そのためどちらも発達し治っていくことを実践し実証している。

発達に大きくかわる大人との信頼関係 愛着障害から考える発達障害

ではない量の薬を処方されていたとか。

「彼女をどうにか助けたいと言ったら『薬をこんなに出しているんだし、これ以上変えられない』と言われてしまいました。それが悔しくて。でも施設内の若い精神科医が、『一緒にやりましょう』と言ってくれたんです」。

それからは寮職員、栄養士、看護師、医師ら12人でチームを組み、キョウコさんの治療がスタートしました。愛甲さんは、まず彼女の特性を把握することから始めました。「彼女はちょっと触ったり、少し匂いを嗅ぐと誰かわかるんです。そして自然素材のものしか身につけません。子供のころを見ていた職員は『非常に能力が高くて、平均台は子供の中では

一番上手。時間になると、職員の手を引っ張って、帰る時間を教えてくれる子でした』と話してくれました」。それを聞いた愛甲さんは抱っこをしたり、一緒に散歩したりするようになりました。

もう一つ取り組んだのが薬を減らすこと。医師と協力して、彼女に合う薬を探していきました。これまで強い薬を飲んでいたので、禁断症状が強く出ることもありましたが、順調に服薬量を減らしていったといいます。

取り組みが始まって3ヶ月後、これまで何十年も職員を悩ませた噛みつきや自傷行為がなくなりました。6ヶ月後には、薬も2種類ほどに。そのあたりから、今までなかった表情も出てくるように

なり、反応が返ってくるようになったといえます。「とにかく人間らしくなって、最終的には1人部屋から2人部屋に移動して、穏やかに今も暮らしています」。

知的障害と愛着障害 発達に関わる類似問題とは

さまざまな人と出会う中で感じたのが「子供たちが早く自立しすぎている」ということです。例えば敏感で繊細な特性を持つ自閉スペクトラム症。「生まれて間もない赤ちゃんが抱っこされたとき、普通だったらそれが気持ちいいし、安心安全を感じる瞬間。でもそれが辛ければ、その時点で愛着の土台が脆弱に

愛着関係の発達ピラミッド



愛着関係と発達は大きくかかわっています。
ここでは段階と発達について説明します。

【胎児期】

胎児は母親と一心同体で生きている。その命は、すべて母親に委ねられている

【出生期】

赤ちゃんは産道を通して、子宮内から外界へと生まれ出る。臍帯を通じての胎盤呼吸から肺呼吸に変化させて、母親の胎盤から切り離されて生きていくことになる

【自他未分化期】

赤ちゃんは養育者に抱っこしてもらい、おっぱいを飲ませてもらって、養育者と一体化した状態で生きている

【共感期】

赤ちゃんや養育者とが同じ対象を見たり、聞いたり、味わったり、触ったりすることで、感覚器を通して共感しあえるようになる

【自他分化期】

養育者との間に愛着の絆が出来ると、見知らぬ人と養育者とを区別するようになり、養育者以外の人に不安を覚え、養育者に安心を覚えるようになる

【後追い期】

養育者に急にまわりつくようになり、後追いがはじまる

【移行対象期】

赤ちゃんは言葉によって養育者に甘えることが可能になる。養育者の膝を基地にして、次第に行動範囲を広げていき、移行対象が養育者代わりとなって養育者がいなくても大丈夫になる

【内在化期】

養育者が内在化されて、ひとりで過ごすことが可能になる

※「愛着障害は治りますか？」愛甲修子著より

知的障害は
治りますか？

著者 愛甲修子



知的障害が治る現場を見てきた心理士がそのプロセスを語った一冊。編集者との対談形式で、様々な事例が紹介されています。





横浜市教育委員会
公式note
「ヨコエデュ!」



002 小1年
「なんじなんぶん」



加藤 智敏さん

横浜市教育委員会事務局 学校経営支援課 教育イノベーション担当課長。元小学校校長であり、外国籍児童が多い多様な現場での経験を持つ。データサイエンスを活用した個別最適な学びの推進や、動画プロジェクトを牽引している。

子ども主体の学びの実現に向けて。横浜市教育委員会が育む「学びのきっかけ」は、すべての子どもたちが自分らしく輝き、お互いに支え合える未来の教育

決方法、④まとめ、という4つのフレームに当てはめることで、子どもたちは迷わずに企画を組み立てることができました。「子どもたちは、自分のつまずきの経験をもとに『ここが難しいんだよね』『こう考えたら分かった!』という視点を盛り込んでいきます。みんなに分かりやすい動画にするにはどうしたらいいか、本当に生き生きと話し合っていましたね」。

研究員の三輪さんは「すらすらと解を提示するのではなく、キャラクターたちも迷いながら正解に辿り着くことで、子どもたちもより共感して見られるよう工夫しています。また、退屈しないよう一つの動画が3分以内に収まるように今は制作しています。動画であれば、再生速度を変えたり、一時停止したり、巻き戻したりも自分のできるのです、そこも

「自分が作った動画を誰かに見てもらえる、役に立てるという経験は、子どもたちの自己肯定感を大きく高めます。勉強は難しい、辛いと感じていた子が、動画を通じて『自分にもわかる!』『やってみたい!』と思えるような経験が、子どもたちの手によって自然と生まれているのが何よりの驚きです」と加藤さん。

学べる仕組みを整える一方で、現代的な課題も。「オンラインだけが教室ではない今、子どもたち一人ひとりの学びがどう成果につながるかを、企業の方や専門家の方など、本当にいろんなプロの知

恵や経験をもらい改善していくことが、今後さらに大切になってくると思っています。例えば、海外で学校教育に取り組む有識者にお話しを聞いたり。オンラインの中で繋がっていく子どもたちにも、学校でどんな環境を提供していけばいいのかを模索しています。学校という枠を超え、社会や世界とつながることで、学びの教室はどんどん拡張されています。

同じ単元でも、その子のペースでその子に合った学び方ができる

「横浜という地域柄、本当に多様なご家庭、子どもたちがいます。このプロジェクトもまだ始まったばかりで動画の本数もまだ十分とは言えません」とブ

最後に加藤さんは、「従来の学習でつまずいてしまっているのは、決してその子のせいではありません。自分のペースで視聴できる動画という環境は、子どもたちにとって大きな『安心感』や『希望』に繋がると信じています。私たちは、ただ知識を詰め込むのではなく、子どもたちが『これなら自分もわかる!』と自信を持てるような、多様な学びのきっかけをこれから多くさん作っていきたくと考えています」。

子ども主体の学びの実現に向けて。横浜市教育委員会が育む「学びのきっかけ」は、すべての子どもたちが自分らしく輝き、お互いに支え合える未来の教育

子どもが主役の動画作りで、 学びの壁をワクワクに変える!

—横浜市教育委員会が挑む「学びのきっかけ動画」プロジェクト—

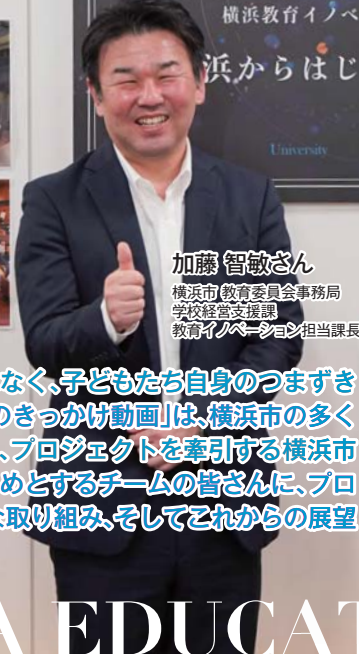
三輪 夏奈子さん

横浜市 教育委員会事務局
学校経営支援課 一種研究員



加藤 智敏さん

横浜市 教育委員会事務局
学校経営支援課 教育イノベーション担当課長



本間 崇大さん

横浜市 教育委員会事務局
学校経営支援課 担当係員



細水 大輝さん

横浜市 教育委員会事務局
学校経営支援課 指導主事



教員が一方的に解説する動画ではなく、子どもたち自身のつまずきや気づきをもとに作られる「学びのきっかけ動画」は、横浜市の多くの学校に広がっています。今回は、プロジェクトを牽引する横浜市教育委員会の加藤智敏さんをはじめとするチームの皆さんに、プロジェクトに込めた想いや、具体的な取り組み、そしてこれからの展望についてお話を伺いました。

YOKOHAMA EDUCATION INNOVATION

「教わる側から『伝える側』へ。
子どもたちが学びのサポーター

「これまでの動画って、どうしても大人が『ここが大事だよ』『こうやって解くんだよ』と教えるものを中心だったんですよ。そう語るのには、元校長としての現場経験も豊富な加藤さんです。横浜市では、データサイエンスを活用して子どもたち一人ひとりの学習状況の伸びをきめ細かく測定するシステムを導入。その結果、子どもたちが具体的にどこでつまずいているのか、その「ポイント」が明確に見えてきたと言います。

「データでつまずきが分かったのなら、そこを解決する動画を作ろう、とでも、教員が解説するだけでは子どもたちは退屈してしまいます。

そこで、子どもたち一人ひとりが「学びのサポーター」になって、アイデア出しなどを通じ、学習動画コンテンツ作りに参画できる仕組みを作ってはどうか、と考えたのが昨年度からの本格的な始まりでした。

長期休み期間などを利用し、保護者と一緒に制作できるよう早期から案内を実施。子どもたちが「どうすれば友達に伝わるか」を必死に考えることで、制作者自身の大いなる学びのステップにもなるという、新しい視点のプロジェクト

が誕生したのです。

日常の課題が四コマ漫画の
ように学べる動画を目指して

実践された横浜市立日野中央高等特別支援学校などで、現場を見ていた細水さんは次のように話します。「ある授業では、64名の児童生徒が参加し、4人のグループに分かれて動画制作を行いました。学校の先生の協力のもと、2時間の構成で、1時間目は動画の視聴と企画、2時間目に動画イメージの制作というスムーズステップで進めたんです。ここで肝となるのが「四コマ漫画形式のひな形」です。①疑問提起、②問題提示、③解

